

ここあたりからは、「純粋な文法論」というよりは、「言語表現と解釈論」となっておりま

第25講 「単純条件提示文」と「仮想条件提示文」

従来、「条件提示表現」の学習の一部を「仮定法」と称して提示されていましたが、
それではみなさんの得心を得られたのでしょうか

「仮定法」という言葉は知っているけど、実際は何なのかがよくわからないのが実
態ではないでしょうか

そもそも、「仮定法」という言葉が解りにくいのです

「仮定法」という言い回しは「動詞」の「使用法」のことなのです

「事実と違う仮定のことをいう場合」の「動詞」の「用法（瑣末な現象）」に「仮定法」と名前をつけて、「仮想条件提示表現」の学習を「仮定法」と銘打ちぶち上げるから判
らなくなるのです（ついでに言わせてもらえば、「単純条件提示表現」に関する学習を
ほとんどすること無しに、「仮想条件提示表現」の学習を押し付けてくるのです）

「仮定法」といって学習させようとするのは、実際は、「仮想条件提示」の表現方法に
ついての学習なのです

しかし、殊更に「仮想条件提示表現」だけを学習しても、「単純条件提示表現」を基
本とするはずの「条件提示」に関する表現の全体像を認識理解することは困難です

本講では、「条件提示表現」の全体について詳しくみていきます

まずは、「条件提示」という表現の実体は何かを分析・分類し、その文法的規則性を
できる限り論理的に説明すべきなのが本来のやり方でしょう

瑣末な現象に名前をつけて、それを「上位概念」としようとするのが無理なのです

「条件提示の表現法全般の分類・検討」が「統括上位概念」（大きな視点・学習目標
範囲）だと考えます

それでは、これから「仮想条件提示表現」を習得する前提となる「単純条件提示表
現」を含めた「条件提示表現」全体を学習していきますが、「条件提示表現」とはどん
なものなのかという観点を柱として、まずは、以下に示すいくつかの『「条件」の「根
本前提』で、「条件提示表現」の全容の認識理解のために、「条件提示表現」の理解の
大前提や全体像を俯瞰（ふかん）してから、「本論」に入っていきます

「本論」といっても、「本論」そのものは、「条件提示表現」の詳細な分類と例文の
学習という技術的なものにすぎませんから、本講では、「根本前提」の認識理解のほう
が絶対的に重要なことをご承知のうえ学習してください

『「条件」の「根本前提」』の段取り

㊦ 「条件提示表現」の認識・理解

- I 「副詞系」の確認
- II 「条件」の認識
- III 「単純条件」と「仮想条件」の認識・理解
「現在の願望」「過去の後悔」「未来への予備・決意」とは

㊧ 「レトリック」と「真意」

㊨ 「条件文」における「真意」の読み取り

㊩ 「条件」と「結論（帰結）」に「真意」

㊪ 「条件内容の実現」の「程度論」

しつこい内容ですが、認識力・解釈力・読解力・社会力の増強のためには必須の理解ですので、頑張ってください

では、**『「条件」の「根本前提」』**に入ります

㊦ 「条件提示表現」の認識・理解

「条件提示表現」とは、「副詞系」で「条件」を提示し、「主節」でその「結論（帰結）」を提示する表現であり、その「真意」を読み取ることが要求されるものです

「条件提示表現」の学習は、**I**、「副語」「副句」「副節」の「副詞系」を理解・確認し、**II**、「副詞系」のなかの「条件」の概念を認識し、**III**、**「単純条件」**の認識理解を前提に、「単純条件」と**「仮想条件」**との本質的相違がわかって初めて「仮想条件」への深入りができるのです（段階を確実に追ってください）

I、「副語」「副句」「副節」の「副詞系」の理解はもう大丈夫ですね（確認）
II、「条件」とは、「成績があがったら、小遣いをあげてあげる」のように、いきなり小遣いがあがるのではなく、「成績があがる」という「副詞的な場面状況が必要」ということである、というのは解かりますね（再認識してください）

Ⅲ、そもそも、「条件」には、「**単純条件**」と「**仮想条件**」があります
そこに、「現在」「過去」「未来」の時間の区分がからめられてきます

「**単純条件**」 → ①「現在」②「過去」で確定した事実を作文者が知らない場合の条件提示や③「未来」の一般的に起こりうることにに関する条件提示です
①「今暇なら、掃除を手伝ってください」
②「昨日彼が学校を休んでいたなら、あの新任教員を見てないよな」
③「明日晴れたら、釣りにいきましょう」(→後述しますが、「**時条副節**」の問題)

「**仮想条件**」 → ④「現在」⑤「過去」の確定で既知の事実^{に反する}条件提示(「**反実仮想**」と称されています)や、⑥「未来」の起こりえないことを想定する条件提示です(従来、この④⑤⑥を「**仮定法**」と称されて喧伝されてきました)決まってしまう現実^{に反する}想定をした条件提示(④⑤)や「未来」の通常予想される出来事を逸脱した条件提示(⑥)ということ^{を認識してください}
④「もし、今、私が鳥だったら、あなたを救い出すのになあ」(当然、人間ですね)
⑤「もし、あのとき、その場にいたとすれば、あなたを支援できたのになあ」
⑥「もし、明日、西から太陽が昇ったら、私の全財産をあなたにささげます」

「**仮想条件提示表現**」とは、「**現在**や**過去の**ことに関して、**現実とは違う**こと、既定の事実^{に反する}ことを想定し」「**未来**のことに関しては、**まず起こりえない**ことを想定し」、その条件下で「**現在の願望**」「**過去の後悔**」「**未来への予備・決意**」等を表現することです(「**推量**」の意味合いを持つことから「**助動詞**」が使われます)
「**現実とは違う**こと、**決まった事実^{に反する}**ことを想定」するのは「**副語・副句・副節**」で、「**願望・後悔・予備・決意**」するのは「**主節**」です

ここで確実に認識してほしいのが、**①「現在の願望**」と**②「過去の後悔**」に**③「未来への予備・決意**」という「**三種の仮想条件**」による「**真意伝達**」の実態内容です
①「現在の願望」とは、「**今、大金持ちだったなら**」というような「**現在の現実(貧乏)**」に反することを「**仮想**」して、何かを「**願望・欲望**」することです
②「過去の後悔」とは、「**あのとき、ちゃんと・・・してたら**」というような「**過去の実際の行動や事実**」と「**違う行動や事実**」があれば「**また別のもっとよい現実**」が「**成し遂げられていたり、存在しえたのになあ**」と「**後悔**」することです
③「未来への予備・決意」とは、「**太陽が燃え尽きたら、地球はどうなるの**」「**西から太陽が昇ったとしたら、あなたの望みを全てかなえます**」というように「**まずは起こりえない未来の条件**」を提示し、「**未来への予備・決意**」を述べること^{です}
このような、基本的な「**三種の仮想条件**」というものを認識して進んでください

弐 「レトリック」と「真意」

次に、「条件提示表現」の深い理解の基礎となる、「レトリック」「修辞(法)」と「真意(伝えたいこと・本音)」について認識していただきたいと思います

主観のかたまりで他人の心情を知るテレパシーのない人間は、自分の思い(真意・本音)をどう伝えたらいいのかという迷いのなかで表現することを強いられています
ストレートに言えば軋轢が生じるかもしれないし、雰囲気は崩れるかもしれないし、遠まわしに言えば、真意は伝わらないかもしれないし、浮くかもしれないし等々です
そして、飾り立てたり巧みに表現することを「レトリック」「修辞(法)」といいます(「仮想条件提示表現」は「レトリック」のひとつであり、典型ともいえるものです)

「世の中に絶えて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし」(『在原業平』)
(この世に完全に桜というものがなかったら、いつ咲くとかいつ散るとかあたふたせずに、春の頃はのんびりした心でいられるだろうになあ)

いきなり、古文の「せば～まし」の公式です

「反実仮想」といいますね(レトリックのひとつです)

現実に反することを仮想して、願望や後悔を詠い、感情表現をすることですね

「この世に全く桜というものがなかったら」で、「現実にはありえない条件」をいっています(「反現実の仮想条件」「副節・条件節」)

「春の頃はのんびりした心でいられるだろうになあ」で、「願望」される「結論(帰結)」をいっています(「主節・帰結節」)(散りゆくはかない桜を見ずに済むのです)

「せば=If」「まし(助動詞)=would(助動詞)」という感じでしょうか
(この実態がつかめるようになるのが本講の目標です)(「助動詞」といえば「推量」ですね)

この世から桜の木が完全になくなることは、まずありえませんね

このように、ありえない前提事実(反現実)を持ち出すのが「仮想条件」です

(英語では、この場合に使う「動詞」の形態を「仮定法」というのです)

作者は本当に桜がなくなってしまうばいなんて思っているのではありませんね

(本当は桜が大好きで、千回万回の春の訪れや常春を望んでいるのかもしれない)

桜があると春はそわそわするし、なければ情緒豊かには過ごせないしで、困ったもんだと悩んで詠っているのでしょうか(これが真意で、揺れる心情解釈が古文です)

もっと言うと、毎年来る桜の開花(再会)風散(別離)に思いを寄せているのです
あまりに美しい季節に思い悩み、いっそ無くなってしまうばいとまで愛してるのです
ついでに余談ですが、日本人は近年新参クローンのソメイヨシノごときの開花風散に感動していいのでしょうか(本来の日本古来の桜は、「エドヒガン」「ヤマザクラ」です)

「真意」と「レトリック(修辞)」の関係をおわかりいただけましたでしょうか

参 「条件文」における「真意」の読み取り

さらに、その次は、「条件提示文では、常に『真意』を読みとらなければならない」という任務について考えます（表面的なレトリックに騙されてはいけません）

「条件文」では、『文。』を訳して文面をそのままとればいいものではありません
「何を言わんとしているのか」という『真意』を読み取らなければならないのです
文脈に隠れている「本当の現実」と「理想の状況（願望・後悔）」という作文者の「真意」を汲み取らなければならないのです（「レトリック」に振り回されてはいけません）
特に「仮想条件」においては、「真意」が強烈であり、読み取りが絶対的なのです
例えば、「もし私が鳥だったら、あなたのもとに飛んでいけるのになあ」という字面はどうでもいいのです（「鳥」もどうでもいいので、すぐに飛んで行ければ「ロケット」もありです）
「私は鳥ではないので、あなたのもとには飛んでいけません」というような「反対描写」の言い換えも無意味で徒労です（字面をなぞるような形式的言い換えは無駄中の無駄です）
「今はあなたに会えない」という現実と、「あなたにすぐ会いたい」「あなたと24時間いつでも一緒にいたい」という「理想の状況（真意）」を読み取ってください
「率直な真意」を汲み取る「心情解釈」が重要なのです（「あなたが、ディスクィを読み取ってください」）
「あなたに今すぐ会いたい」という隠れた心情吐露に気づかず、「条件」を使った遠まわしな表現（レトリック・修辞）の表面的なものに惑わされてはなりません
読み取るべきものは、字面ではなくあくまで「作文者の真意」なのです

では、「条件提示表現」について、さらに具体的に詳細に学習していきましょう

「直説法」と「仮定法」（形式的観点）

「直説法」

「仮定」の話ではなく、「事実」をそのまま「事実」として伝えようとするとき、「現在」のことを作文する場合には「現在形の動詞」を使いますし、「過去」のことを作文する場合には「過去形の動詞」を使います
これを「直説法」といいます

「仮定法」

「現実にはありえない話（現実に反すること、反現実）」すなわち「仮想（仮定）の話」を言うときの「動詞」の形を「仮定法」といいますが（例えば、「was」ではなく「were」が使われるということを特徴としています）、実態的に重要なのは、
«「現在の仮想」には「過去形」を使い»、
«「過去の仮想」には「過去完了形」を使い»、
«「未来の仮想」にも「過去形」を使う»という「時制がひとつ以上ずれている」ということです

「事実提示」か「条件提示」かで、その使われた「動詞」の形を「法」というのですが、瑣末で技術的なことですね（重要なのは、「条件提示表現」の実態です）

四 「条件」と「結論（帰結）」に「真意」（実質的観点）

「条件」

単に事実を伝えるだけのときは「条件」をあげる必要はありませんが（「私は王様です。」「私は王様でした。」となります）、「仮定」「仮想」して作文する場合は、「仮定・仮想する条件」をあげることとなります（「条件」からは「真意」を読み取るのは困難です）たとえば、「もし私が王様だったら」というような具合です

これは、「副節」であり「条件」をあらわしています（しつこいですが、「仮定」「仮想」する『文。』が一般的には「仮定法」と思われておりますが、従来の文法説明では、そこでの「動詞の形」が「仮定法」と命名されているのです）（まずは、「条件」概念一般の理解が重要なのであって、「動詞」の使われ方は後の技術的問題です）

「結論（帰結）」と「真意」

で、「もし私が王様だったら」という「仮想」で止まることは通常ありえません
「では、どうするのか」という「結論（帰結）」が必要となります
この「結論」は、「副節」とは別の「主節」で示します（ここが「真意」への端緒です）
例えば、「みんなを幸せにするのになあ」などです（→さらに深い真意として、紛争・貧困・病気等で平和・幸福でない世の中を正したいという理想等があるのです）
実体は、王様であることが主眼ではなく（ある意味どうでもいい）、それを足掛かりに「実行実現したい内容・真意」があるのです（ここが「真意」の読み取りですね）

文法的には、「仮想・条件」を「副節」であらわし、「結論（願望・後悔等）」を「主節」であらわすのです（この「主節」をここでは「帰結節」といいます）（下の例文では、「副節」で「現在の反実仮想」、「主節」で「現在の願望」をあらわしています）
（・・・でも、どうあれ「レトリック」に過ぎませんね・・・）

英語で、「現在の仮想・願望」をあらわす場合、前提条件の「副節」の「動詞」にも「帰結節（主節）」の「助動詞」にも「過去形」を使うのです
形式的には「助動詞の過去形」と言われていますが、実質的には「現在推量形」なのです（実質的な内容を吟味せずに、形式的に「仮定法過去」と喧伝するのも無責任な話ですね）（こういう表面現象だけを捉えて「仮定法」といって何になるのでしょうか）

If I were a king, I would make everyone happy.
「もし今私が王様だったら、みんなを幸せにするだろうになあ。」

ここで興味深いのが、「現在の願望」を表現する「条件節」が、日本語でも、「過去形」のような表現になっているということです（「もし今~だったら」と過去形を使う）
現実と違うことを想定する場合は、現実離れという観点なのか、英語でも日本語でも時制をずらした表現になるのでしょうか

五 「条件内容の実現」の「程度論」

「条件」の実現の程度

「条件」といっても、「実現の程度」は「ゼロ」から「100」までいろいろあります

「ゼロか100か、有るか無いか」を「可能性」といい、「ゼロを越えたところから100未満の細かな段階」（ここでは「1から99」と考えてください）を「蓋然性（がいぜんせい）」といいます

作文者が、未来のことについて、同じことに関して作文する場合でも、「もしフカヒシを食べるなら」のように「実現はありうるもので、五分五分程度かそれ以上だ」と思えば単なる「単純条件文」を使いますし、「あまりに高価でありえない」と思ったり、「もし私が鳥だったら」のように「全く実現しない（可能性がない）」とか、「もし私が王様だったら」のように「ほとんど実現不可能（蓋然性が低い）」と思えば、「仮想条件」を使うのです

ただ、「鳥」と違い、「王様になる可能性」は人によっては（王位継承権者・王族、革命等）、全くなくはないので、どちらでも作文できるのです

「単純条件」か「仮想条件」かは、「実現の程度に関する思いとその表現」という作文者の選択に委ねられている面もあるのです

ここまでの学習内容は、「条件提示」の表現方法の「根本前提」なのですが、お解かりいただけましたでしょうか

それでは、**「本論」**に入りましょう（あまりに長い「前置き」で申し訳ありませんでした）
では、まずは、日本語で考えてみましょう
はじめに、現在の「単純条件」です

「早とちりのお前が馬鹿なら、鈍い俺は阿呆だな。」

「現在」のことを単純に言っていて、「現在形」を使っていますね（「現在単純条件」）
特に、「現在の仮想」や「現在の願望」のような深い「真意」はなさそうですね

英語でも、「単純条件文」では、「現在のことは現在形」で「過去のことは過去形」であらわします（「直説法」）（未来のことについては「副節」に例外があるので後述します）

英語では、「仮想条件文」では、「現在のことは過去形」で「過去のことは過去完了形」であらわします（この動詞の使い方を「仮定法」というのです）

次に、日本語で、「仮想条件」をみてみましょう（「現在・過去・未来」とのからみに注意です）

「もし、今、お前が王様だったら、みんな不幸せになってしまうだろうになあ」

「現在の事実（王様ではない）」に反する「仮想」を「条件」としてしていますね（「**現在仮想条件**」）（「お前が王様ではないのでみんな幸せだ」と言い換えて意味がありますか）

「王様なら」と「現在形」でもかまいませんが、「現在の仮想」を「過去形」のような「だったら」という表現がよく使われます（日本語でも、「現在の仮想」を「過去形」のような形で言いまわしているんですね）

ここでは、「お前のような人間が王様だったら世の中が滅茶苦茶だな」「お前が王様だなんて絶対ダメだ」という「現在の願望」が「真意」として読み取れますね

「もし、あのとき、私が王様だったら、みんなを救えただろうになあ」

これは、絶対にひっくりかえすことのできない「過去の後悔」をいっています（「**過去仮想条件**」）（「自分ならできたのに」というような絶対的な自信が「真意」なのでしょうか）

「仮に、将来、お前が王様になるとすれば、みんな逃げ出さうだろうになあ」

これは、まずありえない「未来の仮想・予備・決意」ですね（「**未来仮想条件**」）

「条件」のまとめ

「単純条件」か「仮想条件」か

「現在・過去の確定した事実を知らない」うえでの条件提示や、未来のありうる範囲内の事象の想定 （「実現は五分五分程度かそれ以上」と思う）	「現在」「過去」「未来」の 単純条件
「現在・過去の確定した事実」に反する条件提示や、未来の「全く実現しない」「ほとんど実現不可能」と思われることの想定	「現在」「過去」「未来」の 仮想条件 （ <i>仮定法</i> ）

「仮想条件」と「とき（現在・過去・未来）」

「現在」の事実に対することを想定する 「現在の反実仮想」と「現在の願望」	現在仮想条件 （ <i>仮定法過去</i> ）
「過去」の事実に対することを想定する 「過去の反実仮想」と「過去の後悔」	過去仮想条件 （ <i>仮定法過去完了</i> ）
「未来」のほぼ起こりえない様々なことを想定する 「未来への仮想」と「予備・決意」	未来仮想条件

以下に、「現在」「過去」の「事実」や「未来」の「こと」に関する「知」「不知」「条件」について、表にまとめてみました

はじめのうちは理解困難かもしれませんが、講末まで読んだあと何度も吟味して、完全理解するようにしてください

(①「現在推量」・②「過去推量」に関しましては、第24講で検討済みです)

事実の知・不知と現在・過去・未来との関係

現在の事実 → 知っているのが原則で、知らない場合の処理が重要

《原則》知っている(既知)(現在時制)	普通の文(「直説法」)
知らない(未知)	①「現在推量」
作文者が知らないことや、断定できない「現在の事実」について、五分五分程度の想定で条件をつける	③「現在単純条件文」
事実をわかってはいるが、「現在の事実」に反する仮想条件をあげて、願望する (「現在の反実仮想(副節)」と「現在の願望(主節)」)	⑦「現在仮想条件文」 (「仮定法過去」)

過去の事実 → 知っているのが原則で、知らない場合の処理が重要

《原則》知っている(既知)(過去時制)	普通の文(「直説法」)
知らない(未知)	②「過去推量」
作文者が知らないことや、断定できない「過去の事実」について、五分五分程度の想定で条件をつける	④「過去単純条件文」
事実をわかってはいるが、「過去の事実」に反する仮想条件をあげて、後悔する (「過去の反実仮想(副節)」と「過去の後悔(主節)」)	⑧「過去仮想条件文」 (「仮定法過去完了」)

未来のこと → 知るよしもないし、事実に反することもないのが原則

単純に未来のことに言及する(未来時制)(推量的一种)	普通の文(「直説法」)
起こりうる「単純未来」のことに条件をつけて言及する (「時・条、副節」)	⑤「単純未来条件文」
「意思未来」のことに条件をつけて言及する	⑥「意思未来条件文」
「ほぼ起こりえない未来のこと」から「普通に起こりうる未来のこと」を様々想定して言及する	⑨「未来仮想条件文」
未確定なことに関わる特別な表現	⑩「未定内容提示 (「仮定法現在」)

③ 「現在単純条件文」

作文者が知らないか断定できない「現在の事実」について、五分五分程度の想定で条件をつける

副節（条件節）	主節
If + 現在形 ,	現在形

If you are free, I want you to clean your room .

「もし今あなたが暇なら、私はあなたに自身の部屋を掃除してもらいたい。」

④ 「過去単純条件文」

作文者が知らないか断定できない「過去の事実」について、五分五分程度の想定で条件をつける

副節（条件節）	主節
If + 過去形 ,	過去形

If he was at the station, he saw the accident.

「もし彼が駅にいたら、彼はその事故を見ていた（だろう）。」

⑤ 「単純未来条件文」

起こることがある程度予想される「単純未来」のことにに関して条件をつける（およそ五分五分の条件の場合）（明日、晴れるかもしれないし、雨天かもしれないし）

副節（条件節）	主節
If + 現在形 ,（「時・条、副節」）	未来形（will等）

If it is fine tomorrow, I will take you to the beach.

「明日晴れたら、あなたを海岸へ連れていきましょう。」

⑤の例文に関して、注意しなければならないことが2つあります

注意1

「時・条、副節」

「単純未来の時または条件をあらわす副詞節では、未来のことも現在形であらわす」という習慣があります（これは使用者本人たちの習慣ですから、理論的にどうあれ、逆らえません）（略して、「時・条、副節」「時条副節」と本書ではいいます）

「If it will be fine tomorrow,」と言っはいけないのです
日本語でも、「晴れたら」と「過去形」のような「た」を使っています

「晴れるだろうなら」というような「未来形」的な言い方はしません

「時・条、副節」には、その他に、「when節」「till節」「until節」に、「群副節詞（群従属接続詞）」の「by the time節」「as soon as節」等があります

（ただ、主語の意思を強調したり、丁寧な依頼をする文では、「If」節に「will」を使ってもよい → ⑥「意思未来条件文」）

注意2

⑤の例文は、通常の場合で、おそらく晴れるという客観的状況と作文者のその認識のもとにあるのです

台風が目前に迫っていて、過去の例ではほぼ100パーセント明日いっぱい暴風雨で晴れることがありえないというような状況下では、ありえない未来のことを想定して言及するのですから（相手をからかう意図なのでしょうか）、⑨「未来仮想条件文」となります

⑥ 「意思未来条件文」

個人の意思により左右可能なことで「意思未来」のことに条件をつけて言及する

副節（条件節）

主節

If + 未来形（will等） ,

未来形（will等）

If you will [would] wait, I will [would] hire a taxi.

「お待ちいただけるなら、タクシーを頼みます。」

（「would」のほうが丁寧ということで、時間に変わりはありません）

If she will forgive me, I will help her.

「彼女が私を許そうと思うなら、私は彼女を助けます。」

㉗ 「現在仮想条件文」(「仮定法過去」)

確定した事実をわかってはいるが、「現在の事実」に反する仮想条件をあげて、別の「理想的事態」を「願望」する(「現在の反実仮想」と「現在の願望」)

副節(条件節) → 「現在の反実仮想」	主節 → 「現在の願望」
I f + 過去形 ,	「助動詞の過去形」 + 「動詞の原形」
	「w o u l d」 ~するのになあ
	「s h o u l d」 ~すべきなのになあ
	「c o u l d」 ~できるのになあ
	「m i g h t」 ~かもしれないのになあ

I f I w e r e a b i r d , I w o u l d f l y t o y o u .

「もし、今、(仮に)私が鳥だったら、あなたのところへ飛んで行くのになあ。」

㉘ 「過去仮想条件文」(「仮定法過去完了」)

確定した事実をわかってはいるが、「過去の事実」に反する仮想条件をあげて、「過去の事実」に関して「後悔」する(「過去の反実仮想」と「過去の後悔」)

副節(条件節) → 「過去の反実仮想」	主節 → 「過去の後悔」
I f + 過去完了形 ,	「助動詞の過去形」 + 「have」 + 「完了分詞」
	「w o u l d h a v e」 ~したのになあ
	「s h o u l d h a v e」 ~すべきだったのになあ
	「c o u l d h a v e」 ~できたのになあ
	「m i g h t h a v e」 ~かもしれなかったのになあ

I f h e h a d b e e n a t t h e s t a t i o n , h e w o u l d h a v e s e e n t h e a c c i d e n t .

「もしそのとき彼が駅にいたら、その事故を見ていただろうになあ。」

ここで、「副詞系」の原点に戻った注意があります

「主節」が「真意」をあらわし必須のようですが、「条件節」は「場面状況」を設定しているものであって、必須のものではありません

また、「条件節」は「副詞系」のひとつにすぎず、「I f 節」は絶対なものではありません(「I f 節 = 仮定法」なんて愚の骨頂にのぼりつめませんように・・・)

他の「副詞系」すなわち「I f 以外の節」「副句」「副語」で言い換えられたり、挿入や省略されていたり、主語の中に条件的意味が含まれていたり、様々あるのです

以下の英文を参照してください（詳細は、別巻に譲ります）

Suppose you were a king , what would you do ?
But for air , we could not live .
I got up early , otherwiae I could not have seen him .
A Japanese could not say such a thing .

この観点からすると、「条件節」を目印とするのではなく、

もうこれからは、主節に「would」「should」「could」「might」を見つけたら、「仮想条件」を疑ってください
まず、「推量」か「仮想条件」だろうなという「あたりと攻め方」が重要です
「would」「should」「could」「might」こそが、「仮想条件提示表現」といわれるものの「正体」だというぐらいの気持ちでいてください

「would」「should」「could」「might」のいずれかの選択は、願望等の作文者の意思の内容や程度による自由な選択によるものです

㊦ 「未来仮想条件文」

「ほぼ起こりえない未来のこと」から「普通に起こりうること」を様々想定して言及する

副節（条件節）	主節
If + should , (万一～) 起こりうることの想定	仮定法（時制をずらす）でも 直説法（時制はそのまま）でも可能
If + were to , 実現不可能なことも想定できる（仮に～）	仮定法

「条件節」の「should」「were to」を特徴としています

If there should be any trouble, I would [will] help you.

「万一何か面倒なことがあったら、私はあなたを助けます。」

If a large earthquake were to happen, I would fly for a moment.

「仮に大地震がおきたら、私はしばらく飛んでいるだろう。」

If the sun were to rise in the west, I would trust you.

「仮に太陽が西から昇ったとしても、私はあなたを信頼するだろう。」

⑩ 「未定内容提示（仮定法現在）」と「sould」

以下の表にあるような「未定内容をあらわす形容詞」「未定内容を従える他動詞」とともに「that名節」を使用する場合、「that名節」の中に「提案・要望」等の意味を伝える「未定内容提示のsould」と命名すべき「sould」を使います

ここで注意しなければならないのが、「sould」が使用されない場合でも、「三単現」「過去形」が適用されず、「原形の動詞」が使われることです（この「未定内容」に関する表現形態は「仮定法現在」といわれていますが、ここでは仮に「未定内容提示」と呼称しておきます）

I t 自 未定内容をあらわす形容詞 that 主 sould 原形 ~ .

主 未定内容を従える他動詞 that 主 sould 原形 ~ .

⇒ I t 自 未定内容をあらわす形容詞 that 主 原形 ~ .

⇒ 主 未定内容を従える他動詞 that 主 原形 ~ .

I t i s n e c e s s a r y t h a t h e b e q u i e t .

I s u g g e t e d t h a t h e g o t h e r e . (提 案 し た)

I s u g g e t e d t h a t h e w e n t t h e r e . (示 唆 し た)

最後の例文のように、「that名節」に「直説法」を使用すると「未定内容提示（仮定法現在）」ではなくなり、意味も変わります

未定内容をあらわす形容詞

「important」「necessary」「essential」等

未定内容を従える他動詞

「ask」「suggest」「require」「request」「order」「insist」「command」「propose」「demand」等

ここまでを、「入門基礎理論編」とさせていただきます

まずは、「英文法理論」の土台と骨格の構築の重要性がわかりましたでしょうか
「英文の構造」というものはつかめたですね
もう、辞書だけの独習も可能となったでしょう

これまでで、「論理」で「本質」「実体」「基本構造」等を見極める目がかなり養われたものと思います（この点はあらゆる面で有効です）
これからは、「詳細知識的事項」をたくさん吸収し、実践へと向かうのです

「現代文」も「古文」も、このように「文法理論」で読んでいくと深い理解や解釈が可能となるとと思います（本書の理解を端緒として、「現代文」「古文」の深い読みへと進んでください）

本書を契機に、「論理思考ができる人間」「論理的結論と論理的理由を提示できる社会人」を目指してますます研鑽に励み、人生を飛躍的発展的に変え、「自己 MAX」に少しでも近づいていけるようになっていただければ幸いです

「自己 MAX」への到達を下支えするものは、「認識力」です
本書の読破を通してわかっていただけたものと思います
人は、見ているようでみていない、わかっているようでわかっていないのです
このことが、「英文法」の真の分析を通して認識理解していただけたと思います

みなさん個々人が、様々な分野で、旧来の陋習は当然ながら、あらゆることに疑問を感じ、新たなる合理的な世界を切り拓き提示できるよう頑張ってください

次講以降（別巻を予定）は、「比較」、さらには「名詞構文とやら」「複合関係詞と呼ばれているものと疑問名節の副節化」「thatの検討」「asの検討」「butの検討」等や「副節の代用等をはじめとした（瑣末）詳細な知識的事項」に進んでいく予定です

2015年春